『シャーロット・ブロンテの生涯』研究(9)

William Scruton　その２

芦　澤　久　江

１．はじめに

ThortonでのBrontë家の生活についてはElizabeth Gaskell（1810-65）の*The Life of Charlotte Brontë*(1857)でさえもほとんど語られていない。その理由の一つはBrontëたちがそこで５年間しか暮らしていなかったということである。William Scruton[1]は多くの発見をしたわけではないが、ThorntonでのBrontë家を調査したということでたいへん意義深い。そのうえScrutonはBrontë一家に実際接したことのある人物を探し、彼らにその思い出を書き留めてもらい、それらを記録に残している。Brontëが会った地元の人々の記録は文学的に価値があるというものではないが、文献的資料として大きな遺産である。そこで拙論ではScrutonが収集した地元の人々の記録を紹介してみたいと思う。

２．Abraham Holroyd

まず最初にScrutonが収集した記録はAbraham Holroyd[2]のものである。彼は詩人でもあり骨董商でもあり、歴史家でもあった。もともと彼はThornton近くのClayton生まれで、子どもの頃、そこで育った。そのころPatrick Brontë（1777-1861）がThorntonのOld Bell Chapelの助任司祭を務めていた。その後Holroydはアメリカへ行ったが、ふたたび戻って来たときCharlotteとの面会を果たすことになるのである。次の手紙はHolroydが友人であるScrutonにThorntonでのBrontë家についての思い出の記録を認めた手紙である。

親愛なる友へ

あなたはソーントンのオールド・ベル・チャペルの思い出を２，３書き留めてほしいと言いますが、そのためには昔を思い出さなければなりません。私がほんの５歳のときにブロンテ一家はソーントンを離れましたので、当然彼らがそこに住んでいたときのことをほとんど知りません。彼の父親と同様に私の父もまた聖職者で、ソーントン･ベル･チャペルに行っており、前者は私がいっしょに教会へ行くようつねに気を配ってくれました。私が日曜学校の生徒になってから、ミスター・ブロンテはそこに日曜学校記念講話をしに来るようになっていましたので、彼をよく知っていました。しかしほんとうの司祭はウィリアム・ビショップ師で第二日曜の晩にクレイトンによくやって来て、現在「ワークハウス・ホールド」と呼ばれる古い労役所で、説教をしていました。この家はりっぱ

な古いエリザベス朝様式のホールでした。

ミス・シャーロット・ブロンテに関しては、私はたった一度きりしか口を利いたことがありません。1853年の夏のことでした。私は少しばかり前、16年間留守にしていたわが家へ戻って来たばかりでした。そしてアメリカ南部に住んでいたとき、『ジェイン・エア』と『シャーリー』に出会い、読むようになりました。そのため好奇心に誘われて、そのようなすばらしい作品を書いた作者に会いたいと願い、ある日曜日にハワースまでやってきました。教会に遅れて着くと、青白い顔の若者が朝のサービスを読んでいるところでした――私が思うには、その人はミスター・G・デレンジーでした。ミスター・ブロンテも説教壇にいました。というのは、少年時代にソーントン教会で以前会ったことがありましたので、すぐに彼だとわかったからです。寺男のミスター・ブラウンは教会のより低い場所でみんなが見えるとても良い場所に私を案内してくれました。説教の前に讃美歌を歌っている間、私はきょろきょろして、私が会いに来たその人を探していました。次から次へ顔をじろじろ見ているうち、ついに聖餐台の近くでオルガンの下にある大きな四角い信徒席に「ジェイン・エア」を、いやむしろ「シャーロット・ブロンテ」というべき人を見たのです。疑いようもありませんでした。というのは教会全体を見回してそのような顔の人がほかにはいなかったからです。そして、小説のなかにある次のような会話が口から出ました。そこではジェインがセント・ジョンにひれ伏した状態で横たわっています。

セント・ジョンは数分、私を見て立っていました。そして付け加えて言いました。「彼女は分別はありそうだが、まったく美人ではありません。」
「彼女は病気なのです、セント・ジョン」
「病気であろうとなかろうと、彼女は不器量です。美の優雅さとハーモニーにまったく欠けています」

それなのに彼女の額は大変幅広くボリュームがありました。私が思うにはミス・ハリエット・マーティノウの肖像にいくらか似ているところを見つけました。頬骨はかなり際立っているように見えましたが、全体的な顔からとても善良でやさしい性質で、彼女が出会う人々にはおそらく大きな力を与えるであろうと思いました。着ているものは質素でした。何のひだ飾りもないガウンで、装飾のない小幅の袖のものでした。肩にはベルベットのケープが掛けられ、これもまた質素なものでした。ボンネットは見た目はきちんとしていましたが、流行のものではありませんでした。ミスター・ブロンテが法衣室から出てくる前に、私はこうした考えごとをかろうじて終えていました。聖句を読誦して、彼はまったく演説をひけらかすこともなく、即席で説教をし、その説教はみごとなほどよく考えぬかれ、平易にまとめられていました。彼は聴衆にこの世のあらゆる快楽の空しさ、人間の命が不確かなものであり、短いものであることを説き、すべての人に宗教を探求することを勧め、その中にあらゆる叡智をこえる神のあの安らぎを必ず見つけることができることを確約しました。

サービスが終わって教会を出るときには、「雄弁な老人」か「才能のある勤勉な彼の娘」のどちら

を賞讃すべきかわからなくなっていました。会衆がすべて去るまで、シャーロットが退出しないことに気づきました。最後の会衆が立ち去るまで待っているのがいつもの習慣だと聞きました。私はできるなら彼女に話しかけてみようと決心し、彼女はいつも教会の裏口から出て行くと聞いていましたので、そこで待っていました。彼女が出る前にすべての人はいなくなってしまっていましたので、そのとき私は訪問した目的をお話しました。その目的とはアメリカの監督教会派で使われている祈祷書を１部、『ジェイン･エア』の作者に贈ることでした。その本はフィラデルフィアで印刷され、きれいに装丁されたものでした。私は彼女の本を読んで、ニューヨークのハーパー社で印刷されたその本を何冊もニュー・オリンズで売ったということも話しました。彼女はそれを家に持ち帰ったかどうかと尋ねましたが、リヴァプールで税関職員に持っていかれるだろうから、持って来ませんでしたと言いました。彼女は祈祷書を褒め、そのお礼を言うと、ニューヨークのハーパー社は彼女に手紙を書いたこともなく、その本を送ってくれたこともないのに、それを何万冊も売ったのだと言いました。司祭館の玄関まで小道をいっしょに歩いたとき、彼女は私に熱心にいくつも質問をして、それに対してすべて答えるとたいへん満足しているようでした。彼女はまた、私が家に帰るまでどこに泊まるつもりなのか尋ねてきましたので、ミスター・ベン・サトクリフの家ですと言いますと、一家は彼女の友人なのでそれはいいと言いました。それから握手をして別れ、二度と彼女には会うことはありませんでした。

彼女は善良な心をもっていると思うと言いましたが、私が言ったことを確証する例をここで述べましょう。友人の一人である若者がある日、彼が作った数編の詩を出版する相談にやって来ました。それらはとてもよいものでしたが、費用の点から――暮らし向きがほんとうに貧しかったので――あえて勧めはしませんでした。しかし話しているうち、彼がいちばん上のお姉さんナンシー・ガーズは若い頃ミス・ブロンテの乳母をしていたと言ったので、私たちはミス・ブロンテに相談するのは何の害もないと判断して、そのことについて彼女の意見を聞くことにしました。それで翌日彼はハワースに行き、原稿をいくつか持って行きました。ドアをノックすると、女中のマーサ・ブラウンがドアを開けてくれ、誰に御用なのかと聞きました。ミス･ブロンテに会いたいと告げると、マーサはすぐに戻ってきて、入るようにと言いました。ミス・ブロンテは彼に会うと、一度も会ったことがなかったけれど、すぐにわかって「まあ、ナンシーの弟さんなのですか？」と言いました。彼女は喜び、詩を読んで、きょうだいのように、すぐに彼の企画と計画を聞いてくれたということを彼は涙を流して私に話してくれました。彼女は詩を出版して途方に暮れたことを彼に話し、結局同じ誤りをしないよう、彼を説得してくれました。しかしこれですべてではありませんでした。家で会話をしている間、彼女が十分意見を言っていなかったのではないか不安に思い、そのとき彼女は体調が優れませんでしたが、出版しない方がいいという彼宛ての手紙を書き取らせて、彼女の父親がそれを発送したのです。しかし結末は次の通りでした。この数週間後、５ポンドを同封した手紙が彼のもとに届き、封筒にはカーライル伯爵――ヨークシャーで寛大さゆえによく知られた貴族――の紋章がついていました」。

３．シャーロット・ブロンテとの一日

次にScruotnが紹介している記録は、名前は明かされていない。ScrutonはこれをThe History of the Spen Valleyの作家でHeckmondwikeに住んでいるFrank Peelのおかげによって借りることができたと説明している。またScrutonによれば、これを書いた作者は地元新聞にはすでに登場しているが、記事を書く程度ではなく、文学年代記に揺るぎない地位を獲得している人物であると述べている。そしてここにはCharlotteが才能をもちながらも、不幸せであったという証拠があるとScrutonは見做している。

この記録は「シャーロット・ブロンテとの一日」という題名で書かれている[3]。以下はその翻訳である。

キースリーの町で道を聞くと、ハワースの村はブラッドフォード、ハリファックス方面の道を約３マイルだと言われました。したがって元気のよい足取りで心軽く南方面に向かって出発しました。たっぷり30分歩いてから、長く続くたった一つの通りが見えました。不意にメイン・ロードと分かれると、急速に約１マイル西の丘に向かって上り、急に曲がって道が終わると、すぐに灰色がかった緑の教会の塔が見えます。尋ねてみると、私が探していたハワースだということがわかりました。いまハワースがどのようになっているかはわかりません。羊毛の取引を大きく拡大したため、ハワースでさえにわかに繁栄と活気ある生活の雰囲気になっていきました。しかし1850年においてそこは私が見たなかで、もっとも死んだような、憂鬱な雰囲気の場所でした。生活の跡、商業の形跡、あるいは往来などまったくありませんでした。まさにその家々は見る影もなく、石が実に悲嘆に暮れているように見えるとしたら、実際そうだったのです。美はことごとくはぎとられ、美しい光り輝く色はなくなり、そこは逸楽の国だったのです。太陽にさんさんと照らしてもらえない場所――その日はいちばん燦然と照っていましたが――「いつも午後のように思われました」。険しい丘の端に辿りつく頃には、私の体は疲れて、元気はすっかりなくなり重苦しく無感覚になっていました。憂鬱にならないでどのようにしてそこで生涯を暮らすことができるのか理解できませんでした。そしていま、パトリック・ブロンテの生涯の秘密を読み取ることができました。ミセス・ギャスケルがたいへん不正確なまま、大衆の視線にそれらをさらしてしまうずっと前にさえ、それについていくつか詳しいことは私の耳にも届いていました。湿った気の滅入る教会墓地を横切って、――敷石をかぶせられた大勢の死者たち、それは暗い憂鬱な町の墓地を未開の孤立した荒野と結びつけているようでしたが――司祭館の前に立つと、『嵐が丘』と『ワイルドフェル・ホールの住人』の内奥に潜むミステリー、エリス・ベルとアクトン・ベルのノーム（地中の宝を守る地の精）のような才能と早すぎる死の謎のすべてが解けました。

司祭館は石造りの低い家で、墓地の一角を占めていました。その場所は孤立していて、教会の創始者は次のように言っていました。「四分の三に死者を埋葬し、残りは、今は生きている人たちを埋葬することになるであろう」。小さな庭がその前にあって、敷石からまっすぐに行けば庭に入ります。

もっと大きな墓に向かうように行くと一歩で司祭館に行けます。敷石の歩道が玄関に続いていて湿った緑の葉で覆われていて、割れ目にはほとんど黒くなった苔が生えていました。庭の片側はさまざまなありふれた田舎の植物や潅木で覆われていましたが、世話や注意をしている跡はまったくなく、秋になり大きくなりすぎた草木が自然を隠し、私は伝説のマンドレーク（ナス科の草本、かつて媚薬などとされた）の植民地を見ているように妄想にかかった気分になりました。家の石は歩道の敷石と同じように憂鬱な色合いをしていました。私が通り過ぎてきた悲しいやるせない家々のなかでも、ここがいちばん悲しげに見えました。

たいへん沈んだ気もちになり来なければよかったと思いました。もし自分の顔を見ることができたなら、葬儀に参列するとき、人が本能的に努めてするあの表情をしていると感じました。またそういう雰囲気の場所に留まりたくないと感じました。元気よくなぜ静かなうす暗い地下墓地にやってきたのだろうか？　ぐずぐずしながら門に立ち、こそこそ逃げて約束の訪問をとりやめようかと半ば考えていると、そのとき別のことで滑稽でかなりへんてこな事件が起きました。

私は当時そぞろ歩きをする際に愛すべき友となっていた一匹の犬を連れていました。庭の小門に私といっしょに、この犬も到着しました。まさにそのとき、たまたま司祭館の犬が太陽の下で昼寝をしているところで、玄関のところで丸く団子のようになって寝転んでいました。その犬はとても年老いていて、歯がなく、そして私が思うにはまったく目が見えませんでした。雑種で、ターンスピットからシープドッグまでイギリスのありとあらゆる犬を掛け合わせているだけでなく、ハワース独自の血統も付け加えられていました。この犬は、エミリが、不気味なほどの想像が頭に渦巻きながら遠くをさまよい、そしてのちに、致命的なイギリスのアトロポス（運命の三女神の一人）――肺病が襲う前に、弱くなりつつある足取りと心臓と頭で、同じ性質をもった憂鬱な荒野を探し求めて、丘を長い間散歩するときの友でした。若さにあふれ、尻尾を振りながら、耳をぴんと立てて、私の犬はこの哀れな年老いた過去の形見のところへ喜んで小走りで行くと、すぐにハワースの教会墓地でめったにどころか、決して聞いたことのないような唸り声が響きました。このときのことは混乱したということしか覚えていません。召使が犬を連れて行き、厩に閉じ込めようとしたと言いました。彼女は細い女性で、体以上に心は女性的で、静かに、おもしろがって笑いながら、挨拶をしてくれました。夕食前に30分、しなければならない書き物があるので、その間彼女の父親と過ごしてくれないかと親切にも問いかけてくれました。ドアを開けると右の小さな部屋に案内してくれ、「お父さん、こちらは私がお話していたミスター・―です」と言って、ドアを閉め、盲目の年老いた男性の前で狼狽し混乱している私を残して去っていきました。もしミス・ブロンテをあまり見ていなかったら、私の心には何の印象も残らなかったでしょう。

ミスター・ブロンテ師はかつては人目をひく非常にハンサムな人だったことをうかがわせました。背が高く、がっしりとして、そのときでさえ背筋をしっかり伸ばしていました。髪はほとんど白髪でしたが、眉はまだ黒々としていました。顔立ちは大きく、ハンサムでしたが、まったく眼が見えませんでした。彼はほとんどすりきれた服を着てとても無頓着な身なりで、ちゃんとしたネクタイもせず、スリッパを履いていました。暖炉のそばの椅子に背筋を伸ばして腰掛け、窓の方を向き、

見えない眼で光の方をしっかりと見ているようでした。その眼は決して、太陽、月、星たちがなくなってしまうとき新しいエルサレムの天上の輝きが光るまで、見えないでしょう。盲目の年老いた犬は盲目の老主人の足許の暖炉のところで丸くなっていました。彼はほとんどすぐに娘について話を始めました。作品を読み、賞讃しましたか？　私はしましたと言い、虜になるほどおもしろく、びっくりするほど独創的であると率直に私の意見を言いました。それは世間の一般的な意見でしたか？　私はよく覚えているたくさんの批評を要約してあげました。いつもゆっくり膝を擦り、半ば独り言のようにつぶやきました。「私はまったくそのことを知らなかった。考えてみても、そのようなことを疑いもしなかった。まったく不思議だ！　不思議だ！」それからエミリやその他の姉妹のことを話し、エミリが家族のなかでも天才であったとどれほど彼が思っていたか、シャーロットがものを書くことができるなどまったく想像もしなかったので、ほとんどそれを理解することもできなかったということを話してくれました。彼はそうしていたように、ときどきふたたび空想に入っては昔のことを繰り返しつぶやいていました。「私はそのことについて何も知らなかった、まったく何も。知っていたら、おそらく止めさせていたかもしれない。しかし何も知らなかった――　何も」。彼には三重の感情があったようです。小説が娘たちから生まれたという落胆、親としてのプライド、それは明らかな、ときにはしゃべりすぎるくらい、これみよがしなプライド、そしてとりとめもなくそれをまったく信じられないという感情を持っていたようです。しばらくして彼は若い子どもたちの時ならぬ死に向き合いました。二人のことを大いに思い、それからもう一度独り言を言いました。「あの子は死んだ！　そしてエミリも。二人とも死んだのだ！　みんな死んでしまった！」

何と彼に話しかけることができたでしょうか？　私のふくれあがった行き当たりばったりの白日夢は何だったのでしょうか、そこに座り、子どもたちがりっぱに成功したことに混乱して、あとに残された暖炉のそばの悲しい磨き石に嘆くこの盲目の廃人にとって、天気が、商いが、政治が何だというのでしょう？　私は何も話すことができませんでした。亡骸のそばで見続けているかのように、ただ心を沈め、意気消沈して座ることしかできませんでした。天才すべてが残した彗星のような軌跡さえ光ってはいないということを生まれてはじめて実際に経験しました。ここにはもっとも独創的な生きているイギリス人女性がいました。彼女は不意にはなばなしくみごとな成功をおさめました。そのペンは彼女にとっては財産であり、彼女の名前は教養あるどのような人でも知っていて、その作品は教養あるどのような人の心にも残っています――そしてこれが彼女の家だったのでしょうか？　私は黙って考えていました。約１時間が経過してから、ドアが開き召使が夕食ですと告げました。

私はロビーを通って左側の居間に案内されると、そこでミス・ブロンテが窓の光をいっぱいに浴びて立っているのに気づき、私の記憶に留めておく十分な機会を得ました。記憶には彼女の姿がこのときまではっきりと残っています。彼女は小柄で、極端なほどきゃしゃでした。手は私がこれまで握ったなかでもっとも小さい手のうちの一つでした。美しいと思われたいという素振りもなく、それと同じように不器量でないということはありませんでした。髪はやや薄茶色で、幾分薄く額に飾りなく下されていました。顔には血の気がなく、唇も青ざめていました。しかしとてもやさしい

笑顔をしていましたが、少し憂鬱な感じがありました。あなたが十分気づくほど、まったく彼女は控えめで慎み深く物静かな小柄な女性でした。年は35歳くらいだと思いました。しかし彼女と眼が合うと、『ジェイン・エア』を作った魂が直ちに明らかになります。眼はやや小さいのですが、とても独特の色をしていて強い輝きと強烈さがありました。カメレオンのようで、異なった茶色とオリーブ色が混じり合っていました。しかしあなたをじろじろ見れば――、その眼は単なる鋭いラーヴァ―ター[4]のような骨相学的特色に注目しているのではなく、あなたの心髄や魂の奥処を繊細に見抜いて、あなたがどのような人なのかということについて意見をまとめているように感じるでしょう。私の手を再び取って、彼女が当然不在にしたことを詫びると、彼女がそうしたように、私をまっすぐ見ました。眼差しには不遜なところはまったくありませんでしたが、隠された秘密を解く才能と権利をもった人の目のように、強く、率直で、鋭いものでした。私は催眠をかけられているかのようで、前にも後にも経験したことのない気もちでした。

視線がそらされると、ほっとしたといっていいでしょう。そして私たちはテーブルにつきました。夕食の間、下を向くと視線が私に注がれているとつねに感じ、私が彼女を見ると、彼女の視線は皿に注がれていました。それでもなお、これらの眼はまぶたを通して見ることができるのだという思いを拭い去ることはできませんでした。簡単な食事が片づけられている間、あまり話はしませんでしたが、のちに２時間以上にも及ぶ他愛もない会話をしました。彼女の会話で記録にとどめるべきフレーズは一つもありません。彼女の発言には何のウィットもなければ、想像力もなく、輝きもありませんでした。彼女の話は力強く、鋭く、質素な感じで際立っていました。短く、簡潔に、率直に、力強く表現されていました。彼女には作家らしいところは何もありませんでした。効果を上げようとする試みもなく、何の言い回しもありませんでした。彼女の話のなかでいいところは、内容にあるのであって、少しもその話し方にあるのではありません。彼女自身や姉妹、家族全体のことは話したがらず、明らかにその話題を避けているようでした。彼女は私自身のことや私の目的、期待、またロンドンの文壇にいる男性たちやその生活ぶりと性格に対する意見に話を限っていました。

私自身に関しては、彼女はすぐに母親のようなといってもいいような口調になりました。私はそのとき、情熱をもった若者だけができる途方もない愚行をしそうになりました。それを何年も後悔しましたが、後になってからはそのような勇気ある末頼もしい向こう見ずなことができる心をうらやましく思えるようになりました。確かな商売を捨て、ロンドンへ上京し、文学という入り組んだジャングルでチャンスをつかもうとしていました。彼女は直接私を思いとどまらせるよう骨を折ったりはしませんでした。私が思うに、この催眠術をかけるような眼が、ハワースを活発にしようとする試みと同じくらい、見込みのない仕事になるだろうと彼女に告げていました。しかし、彼女はお世辞を言ってくれたのですが、もし私だけに価値のある問題について書き続けていっても、極貧に苦しまなければならないということを指摘してくれましたし、またもっとも単調なハワースの生活でさえ、ペンを金を求める文学的綱渡りの舞踊機械に変えるより望ましいと考えているように思われました。しかし間接的な方法で私をロンドンから引き返させるようにしていました。私のために彼女が本当の気持ちを誇張したかどうかわかりませんし、のちにいずれにしても彼女の意見を修

正したかどうかはわかりませんが、確かに1850年文学界の雌ライオンとしてロンドンを訪問してまもなくのこと、もっとも険悪な調子で都会の文学界の生活を描写しました。しかも明らかに、痛烈に、強く嫌っていました――侮辱とさえいってもいいでしょう。ディケンズに彼女は会ったことがあり、彼の天才を賞賛していましたが、好きではありませんでした。倹約家で飾らない内気な彼女は彼を避け、彼は贅沢を見せびらかすと考えて尻込みしました。サッカレーを完全に崇拝していました。カーライルについてはほとんど知りませんでしたが、威厳ある彼の生涯を崇敬していました。もっとも彼の作品については好きではありませんでしたが。評論、形而上的科学的文学において、ある著名な人物のことを極度に毛嫌いしていました。二流のゲリラ的、ボヘミア的文学者たちが大騒ぎしたり、駆け回ったりしていることをとても嫌っていました。臆せず文筆生活を見て、ハワースで生きるというよりそこで死ぬことに満足していました。

こうしている間ずっと彼女は私自身を気遣ってくれました。そのまごころは疑いもないもので、その印象はここちよい感動的なものでなくはありませんでした。明らかに独り言を言いました。「ここには思いつきのよい若者がいます。元気のよい青年の帆をいっぱいにあげ、さまざまな色の高く上げられた想像力は舞い上がり、カリュビデスに襲いかかろうとしています。彼が向かっている先はカリュブディス(ギリシャ神話における海の渦巻きの擬人化された女怪)だということをはっきり示すために私の描写力をふりしぼりましょう。」私は彼女の最後のことばをよく覚えています。「ロンドンに着いたら、文学における最高でもっともすばらしい友情を探し出して、獲得しなさい。サッカレー氏と知り合いになるようにしなさい。またカーライル氏と面識を保っておきなさい。しかし文人だと自分自身を呼ぶ人々全般に関しては道徳上の疫病として避けなさい。」

このときにはもう5時になっていたので、私はいとまごいをしました。裏の道から出て、さらなる騒ぎを起こさずに犬を離しました。ハワースの長い通りを大股に歩き、東の方の丘を上りました。荒野のさわやかなそよ風が吹いて初めて、落胆した憂鬱な感じがともかく晴れたように思いました。しかし実情は、振り返って苦悩と悲しみの気持ちで、遠のく教会と司祭館に別れを告げました。後に残してきた孤独な女性をかわいそうに思いました。彼女が結婚するだろうとは夢にも思いませんでしたが、死ぬにちがいないと感じました。私は残念でした。カサンドラに会った気分で、もっとも彼女のことは心に留めないようにと決めていましたが、私のなかにある今もなお小さな声が彼女の予言は正しい、私が災難の道を歩んでいる途上だと言いました。私は難破船に遭い、そしてミス・ブロンテは亡くなりました。

4.「放浪者」のシャーロット・ブロンテとの面会

次の記録[5]もまた作者の名前は明かされていないが、Frank Peelを通して入手したとScrutonは述べている。

1851年4月半ば、私は気づくとある晩お金もなく、友人もなくキースリーにいました。働いていた

工場はつぶれ、たいていの若者と同じようにあてもなくひまつぶしのためにぶらぶらしていました。夜9時まであたりをぶらついたあと、どこに泊まろうかという問題を考えざるをえなくなりました。ところで私は近くの町のメカニクス・インスティトゥーションで作品を暗唱する教育を受けたり、練習をしたりしていました。空腹と夜風に駆り立てられ、私はその才能を使ってさまざまなパブに行って説明して、そこで見つけた仲間に暗誦することを申し出ようと決心して、寄付を乞いながら歩き回りました。私が最初に入った家は一回の暗誦に6ペンスをもらいましたが、もし私が逆立ちして歌を歌ったら、2倍にしてほしいという申し出をしました。銅貨と侮辱をポケットにしまい、立ち去りました。しかし宿泊代が十分支払えるか心配になったので、勇気をふりしぼり、もっとうまくいくようにもう一軒のホテルを試しました。というのは仲間の一人あるいは二人が、その仲間というのはそのとき町にいましたが、もしミスター・サム・ワイルドに仕えたら、パブを選ぶよりうまくやれるだろうと請け合ってくれたからです。そのとき普通の下宿屋の宿を探していました。身なりを十分整えて――そのような下宿屋にふさわしいものでした――そこの家人は私をとても丁重に扱ってくれました。回り歩いている、あるガラス職人が夕食をおごってくれました。こうしているとき、彼は私に何をそこでしているのかと尋ねました。彼に話すと、ワイルド家に申し込むときのアドバイスももらい、床につきました。翌朝、悲しい災難がふりかかりました――誰かがブーツを持って行ってしまったのです。宿の女主人に言いましたが、どうしようもないと言われましたので、困ってガラス職人に相談すると、彼は私の話を聞くと一足の「プッシャー」を――つまり足の表側はブーツになっていて、後ろ側は切れているものです――買ってきてくれました。これらを履いて劇場支配人と面接することは問題外なので、ガラス職人にその問題点を言うと、すこし考えてから一足のブーツを得る方法があると言いました。彼によると、その日ハワースで仕事をすることになっており、もし私がガラスの入った木枠を運べばよいというのです。私たちは有名な村を苦労して上り、すると彼は家を指さしました。そこにはある女性が――彼は「ミス・シャーロット」と呼んでいましたが――いて、彼女に身の上話をすっかりすれば「一足のブーツ」を何とかしてくれるというのです。彼は私を置いて村を「回り」ました。私は自分の苦しい立場を強烈に感じました。あえて「ミス・シャーロット」を見ることもなく、ガラス職人に二度と会わないでおこうと思いましたが、結局勇気を奮い起こしドアをノックして、その女性への面会を求めました。やがてある女性が出て来て、彼女より若い人を伴っていました。玄関に立ったとき、やっとの思いで何とか身の上話をすると、それから台所に招かれ、コーヒーポットとパンとバターが出されました。私が朝食を終えるまでに、その女性は台所にもどり、私の前に古いブーツをいくつか差し出し、一足履いてみるようにといいました。私が履いてみると、かなりぴったり合う一足のブーツを見つけました。このときには若いほうの女性も台所に戻っていました。二人とも腰を下ろすと、それからミス・シャーロットは「朝食を差し上げ、ブーツもありましたから、少しお話しましょう」と言いました。彼女は本当に私に話しかけ、しかもこの場を去りたくないと思わせるように話しかけてくれました。十中八、九、人々が私と同じような生き方をするのはまったくの怠惰あるいはジプシーの本能からであって、彼らには演劇的才能があるからではないと彼女は言いました。わたしに才能があると

思ったのだろうか？　私はあると思っていましたと彼女に言いました。私は彼女にその見本を見せようと思ったのでしょうか？　ジレンマがありました！　もてなしをされて、どのように断ればよいでしょうか？　非常に困りながらも、彼女の求めに応じましょうと言いました。最初に『若いロキンバー』[6]を最高のスタイルで行うと、それから彼女の母親らしいきびしい目つきが少し和らいだように思われました。彼女はそのとき私の家族やその他のことについてたくさんの質問をしました。それにできるだけ答えました。その他のことがらのなかで、私にはクレックヒートンに親類がいると言い、その親類のことやその近所のことを話しました。すると若い方の女性がもっと暗誦しているものがあるかどうか聞いてきましたので、シェイクスピアを一つ二つできると答えました。より気楽になって、すぐに何のコメントもせずに『ハムレット』から一つか二つ選んで暗誦しました。すると女王が「いつまでも目を伏せて、冥府の父君をのみ慕ひたまふな。生ある者は必ず死す、此世を経て永劫に赴くのは、人の世の常といふもの」[7]というハムレットと母親の会話を暗誦してくれるかどうかシャーロットが頼んできました。私はできるだけその求めに応じました。場面全体を暗誦すると、その女性たちは特に何の関心も示すこともありませんでしたが、ついにハムレットが「其等は只愁傷の飾や衣が、此ハムレットが心中には目に見えがたいものがござる」[8]と言う箇所に来ると、二人ともどっと大笑いをしました。あえてその原因を尋ねませんでしたが、私は不安な眼をしていたと思います。するとシャーロットが「私はブラッドフォードでハムレットの劇を見ました。「あなたと同じように‘suite’という言葉を間違って使っていました。シェイクスピアはその意味で――すなわちドレスという意味ではなく――もっと広い意味で‘sweet’と発音される‘suite’は、王様、女王、その周りの者すべてがただ会葬者の役割を演じているだけで、自分たちのふるまいを彼らの想像された死別――ハムレットの父親の死に――ふさわしく、あるいは調和するようにさせているだけだという意味なのです。」私はあえて意見を言いませんでしたが、本にそう書かれていると思うと言いました。ミス・シャーロットは確かにそう書かれているのだと言いましたが、そうしたことからただシェイクスピアの作品をみだりに変更する先見の明のない無知な人々が明らかになるのだと言いました。他の批評も似たような調子でしたが、そのことについては漠然と覚えています。仕事に戻って、遊びは怠け者たちに任せておけばよいと私にアドバイスしてから、彼女たちは私をドアのところに案内し、さようならと言いました。「ここで私は次のようなことを言っておく方がよいでしょう。前の晩に暗誦した二番目の居酒屋にいた人たちはミスター・ワイルドの団員で、彼らが契約を請け合ってくれたのです。だからむしろ私からブーツをくださいとお願いしてから、シャーロットが一連の質問を私にしたとき、契約が交わされたことを知っていたので、すぐに入団できるブーツがほしかっただけです。家を出るとすぐに、私の友人であるガラス職人を探し、まさに村の窪地で窓を修理しているところを見つけました。彼は私にすぐにキースリーに戻って、支配人に会うようにと言いました。私はそうしましたが、ちょうどそのとき、彼はやれるだけ仕事をいっぱいもっていました。しかしさらに一週間して、定期市を回るツアーを始めるとき、彼は私に建物を建てたり、パレードをする仕事を与えてくれました。頼みもしないのに、彼は私に親切にもハーフクランをくれ、夜には希望するなら舞台裏にいてもよいと言ってくれました。それは午後

ことで、仲間のメンバーを探し出し私の採用結果について彼らに話しました。晩に舞台の裏にいました。ここからが私のお話ししたいところです。劇は『リアの私生活』――それはシェイクスピアの『リア王』を大衆向けにした一種のコピーです。場面が移るとき、私は補助をしていて、最後の場面が終わる前にリアは1シリングもらうために私にお金を受け取って、1ポイント入りポットのブランデーを彼に持ってくるよう用を言いつけました。というのは彼は「ほとんど泣き出さんばかり」になっていたからです。「はなばなしいすばらしい夜」でした。劇場の一階席には約100人の人がいて、横からの入り口から入って片側に移らねばならず、そしてそこにはただハード地の囲いがあるだけで、通らなければならないその一方の側近くにハワース・パーソネージで以前会ったことのあるミス・ブロンテともう一人の女性がいたのです！　私は契約を交わしたことについて嘘を言っていたことで良心の呵責を感じていたので、「私はほとんど泣き出さんばかりだ」という俳優のセリフが耳に響かなければ、彼女のもとをあえて通り過ぎはしなかったでしょう。ブランデーを自分で取りに行く時間があったので、取りに歩いていくとき、私はまるでその劇団に属しているかのように、二人の前を通り過ぎる決心をしました。実際通り過ぎて、彼女たちに大変尊敬をこめてお辞儀をすると、彼女たちはお辞儀をしとやかに返してくれました。舞台裏ののぞき穴からのぞくと、そのあとまもなく彼女たちが帰るのをみました。私に朝食、ブーツを提供し、小言を言ってくれたその女性が『ジェイン・エア』の作者だと知ったのはこのあと数年経ってからのことでした。シャーロット・ブロンテと面会したのだと知って、ごろつきが私のブーツを盗んでくれたことに感謝をしました。

5．おわりに

これまで見てきた記録には、地元の人々が実際Charlotte Brontëと面会したときの印象が率直に描かれている。これらに共通していることは、Charlotteが著名な作家になってからも、訪問した人々に対してたいへん親切であったということである。こうした記録からおそらく似たような訪問が幾度となくあり、Charlotteはさまざまな対応に追われていたと想像できる。

Scrutonはこれらの記録から、Charlotteは決して幸せではなく、Haworthで陰鬱な日々を送っていたと見做している。たしかにこの記録が述べている1850年から1851年の間はCharlotteにとって決して幸せな時期であったとは言えないかもしれない。というのは、このときChalotteはすべてのきょうだいBranwell (1817-48)、Emily (1818-48)、Anne (1820-49) を失くし、残されていたのは眼の見えない父親とCharlotteだけであったからである。しかしこの後CharlotteはArthur Bell Nicholes (1818-1906) と結婚する。Charlotteの結婚については幸せであったか、そうではなかったか、議論の余地があるが、夫を持つことによって少しは希望をもつことができたかもしれない。この記録にあるCharlotteは彼女の人生のなかでも失意の真っ只中にあり、そうした状況が会う人々に暗い印象を与えていたのである。

注

---

[1] Wiiliam Scruton, *Thornton and the Brontës* (Bradford: Johm Dale & Co.,1898)

[2] *Ibid.*, pp.111-15.

[3] *Ibid.*, pp.116-23.

[4] Johann Kapar Lavarter (1741-1801)　スイスの人相学者。*Physiognomisch Fragmente* (1775-78) で人相学を科学に発展させようとした。

[5] *Op.cit.*, pp.124-28.

[6] Sir Walter Scottの物語詩*Marmion*でLady Heronの歌うバラッドに登場する颯爽とした騎士。愛する人の婚礼の宴で花嫁に最後のダンスを願い、そのまま花嫁をさらって行ってしまう。

[7] ウィリアム・シェイクスピア著　坪内逍遥訳『ハムレット』第一幕第二場11.70-4.

[8] 前掲書、第一幕第二場11.85-6